



# ボス猫



川崎ゆきお

「暖かくなってくるといいねえ、人が表に出て来る」  
「気候がよくなると、外に出たくなりますねえ」  
「そうだろ。だから、町内の人口が増えたように見える」  
「でも、出られない人もいるんでしょうねえ」  
「ああ、寝たきりでね」  
「出たがらない人もいますよ」  
「引きこもりかね」  
「そうです。また、用事がないので、外に出ても仕方のない人も」  
「散歩に出ればいいじゃないか」  
「それは一部の人ですよ。散歩好きとか、運動のためとかは」  
「庭木を手入れしている人も見かけるよ。これだけでも、人口が増えたように見える。無人の町じゃないんだってね」  
「それは大げさですが」  
「しかし、表で遊んでいる子供は少ないねえ」  
「それは武田さんのような人を警戒して、親が出さないのですよ」  
「わしのせいかね」  
「この近所じゃ、ボス猫って、言われていますよ」  
「いいじゃないか、町内の治安には」  
「顔を合わすのが嫌だって」  
「最近、わしも気にして、サングラスははずしているよ。目が悪くてねえ。視力じゃないよ。眩しいのを見るときついんだよ。それを我慢して出ているのに」  
「多少はよくなりましたよ。見てくれが」  
「そうか」  
「後は、むやみに話しかけないことですな」  
「ああ、分かっとる。寿司屋の元大将のようにはなりたくない」  
「あの人も武田さんと同類でしたねえ」  
「ああ、この町内の主だよ。外に出て、見かけない日はなかったんだがねえ」  
「その後、どうなんです。あの大将」  
「わしと同じことを言われて、ショックで、それから、引きこもってしまったよ」  
「大石の隠居は？」  
「あの人も同類でね。元ボス猫だ。やはり引退したのは、好意を持たれていないことが分かったからだよ。君のような人が、余計なことを言うからねえ」  
「でも、武田さんはボス猫、続けてくださいよ」  
「そのつもりだが、世間の目は厳しい。最近は道の端をひっそりと歩いているよ」  
「では、そろそろですか」  
「じゃ、君が引き受けてくれるか。世代交代だ」  
「僕は平凡な散歩好きだけの人間なので、町内の人と、あまり関わりたくありません」

「わしと、こうして関わっておるじゃないか」

「武田さんタイプならいいんです」

「そうか、君だけには受けるか、まだ」

「はい」

了